はじめに

一期一会

大学院社会福祉学研究科教授
研究科長　齋藤　繁

木々の芽がふくらみ、雪解けの水音も次第に勢いを増して、春の足音が間近に聞かれる時節となりました。弥生三月は春爛漫花の季節と申し上げたいところですが、北国の春はいまだ浅く、山野は雪で覆われたままです。名峰岩木山の雪景色をバックにして、間もなく平成17年度大学院研究科の修了生７名を送りだそうとしています。大学院修士課程の設置から３年経ちましたが、すでに第１回生10名が先に修了しています。

修士課程２年間の研鑽の成果を論文抄録集として刊行しようという計画が密かにすすめられていました。ようやくここに実現の運びとなりました。院生のみなさんの労苦がこのように論文集として結実したことを、心から喜び祝福したいと思います。

これは研究者としての一里塚、あるいは学問の道のマイルストーンに喩えられるでしょう。次の道標を求めて終わりのない旅がはじまったのだと自覚してください。時には迷路に迷い込み、独り悩むこともあるでしょう。そんな時、仲間と話し合ったり、学会に参加したりすることが多くの疑問点を解き、また新たな問題の発見に導かれるなどして、われわれに励ましと刺激の機会を与えてくれること必定です。これもまた学問することの楽しみのひとつと言えます。

一期一会は茶道の精神を表した言葉ですが、われわれは縁あってここに集い、そして、今また離ればなれになってしまいますが、お互いの心は固い絆で結ばれています。どうかこれを縁にますます結束を深め、切磋琢磨して共に学問の道を歩んでいきたいものです。

新年度からは大学院教授スタッフの陣容も新たまり、ますます人間福祉学の探求に拍車がかかることでしょう。人生至る所青山ありです。全知全能にして慈悲深い神によって創造されたこの世界のなかで、善と悪の戦いがあり、また富裕と貧困とが同居しているのはなぜでしょう。われわれはどこへ行ったらよいのか。このような人間的営為のその結果さえ定かではなく、混迷する坩堝の中で、21世紀の現代人は容易に世界の可能な未来像を描くことができないでいます。この封印された暗号書の解読を、ぜひみんなの知恵と力を合わせてやり遂げていきたい。修了生のみなさんからのメッセージが届くのを心待ちにする所以です。